

# 自立性、関係性、創造性を育てるICT機器の活用

～子供一人一人の能力・特性に応じた言葉の力を育てる国語科学習を通して～

磐田市立長野小学校

〒438-0056  
静岡県磐田市小島736番地

<http://iwata.server-queen.jp/nagano/>

## 1. 研究の背景

本校は、明治6年「切磋琢磨する心を持つ」子供の育成を目指し、龍門館小学校として開学。その後、明治29年長野小学校となり、その教育理念を継承発展してきた。その成果は、昭和47年「火力の強い沸騰した授業の創造」により学研教育賞、昭和62年・平成元年文部省道徳教育研究指定、平成11年第44回才能開発教育実践賞、平成24年度「はごろも研究助成」「ちゅうでん教育研究助成」として成果を得てきた。しかし、現代社会は「少子高齢、核家族、地域連帯、IT、知識基盤、グローバル化」などの新しい課題が蓄積し、加えて様々な情報の氾濫により何が正しいのか、間違っているのかを容易に判断できなくなっている。特に東日本大震災は、安心、安全、豊かさへの不安と未来を切り拓く資質・能力を身につけることの必要性が求められるようになった。

## 2. 研究の目的

研究の背景を踏まえ、これまで140年間続けられてきた龍門館教育を見直し、「自ら課題を見つけ、解決のために自らの責任で意欲的に学ぶ(自律性)」「自らの考えを回りの人と共に語り合うことで解決を図る(関係性)」「自分なりの考え方・感じ方を大切にしたい思考力・判断力を身につける(創造性)」子を育てたいと考えるに至った。そのために、体験を通して感じるということを大切に、自らの思いや考えを再考し、新たな思いや考えを経験として再構築することができる学習を創り出したい。このような学習では、「言葉」に置き換えられて理解や思考がなされ、体験と結びつくことで「言葉の力」となる。この「言葉の力」の向上を図ることが「自律性、関係性、創造性のある学力」を育てることにつながる。そこで、ICT危機を活用し、子供一人一人の能力・特性に応じた学びが保障され、子供同士が学び合うことで、新たな経験でき、そのことが子供の発言につながり、子供の思いを語り合い、子供の学びが深まっていく学習を目指したい。

## 3. 研究の方法

### (1) 言葉の力を育てる教育活動の開発

#### ア 系統性を考えた年間指導計画の作成

(ア) 実態を把握し、単元・教材で子供に身に付けさせたい言葉の力を明確にしながら年間指導計画を作成する。

(イ) CAPDサイクルによる国語科の授業を展開し、子供の学びに応じた国語科授業の改善を進める。

#### イ 計画を立て継続して言葉の力を育てる表現活動に取り組む。

(ア) 言語表現活動、言葉のスケッチ、音声表現活動に取り組む。

(2) ICTを活用した国語科指導の展開

ア ICTを利用して書く活動に取り組む。

イ 表現力を高める工夫をする。

(ア) 自己表現したくなる授業展開をするために課題設定や発問を工夫する。

(イ) 自分の考えを書くことで表すために、タブレットに記載し互いに評価し合う活動を取り入れる。

4. 研究の内容・経過

(1) 言葉の力を育てる教育活動の開発

○ 系統性を考えた年間指導計画の作成

言葉の力を育てる教育活動を開発するために、子供の実態を把握し、単元・教材で子供に身に付けさせたい言葉の力を明確にしながら年間指導計画を作成した。各学年で学習指導要領を読み込み、A話すこと・聞くこと、B書くこと、C読むこと、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項の領域を横軸に、各単元を縦軸にして全学年の年間計画を作成した。(図1)

**第1学年 国語科年間指導計画**

<図1>

月	指導事項等	関心意欲態度	A話すこと 聞くこと			B書くこと			C読むこと			伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項			言葉の力を育てる活動			
			話す	書く	読む	書く	書く	読む	読む	読む	読む	読む	読む	読む	読む	読む		
9	いちねんせいとうた	②	○															
	ゆうだち	⑧	○			◎			◎	◎								
	おはなきいて	④	○		◎	◎	◎											
	かずとかんじ	④	○					◎										
	みいつけた	⑧	○					◎		◎								
10	かたかなをみつけよう	②	○				◎											
	かんじのはなし	⑦	○				◎											
	くじらぐも	⑩	○						◎	◎								
	しらせたいな 見せたいな	④	○				◎		◎									
11	ことばであそぼう	②	○									◎						
	じどう車くらべ	⑫	○	○				◎	◎									○
	まのいいりょうし	①	○							◎			◎					

言葉の力を育てる活動

語彙を豊かにする

表現力を高める

読書の世界を広げる

言葉集めゲーム

名文スキルの  
音読と書き写し

○ CAPDサイクルによる国語科の授業を展開

C: 児童の見取りと単元に向けての考察

前単元の学習の様子から、子供の実態を見取り、考察をする。

A: 「言葉の力」を育てる学習基盤～いしずえタイムの取組み～

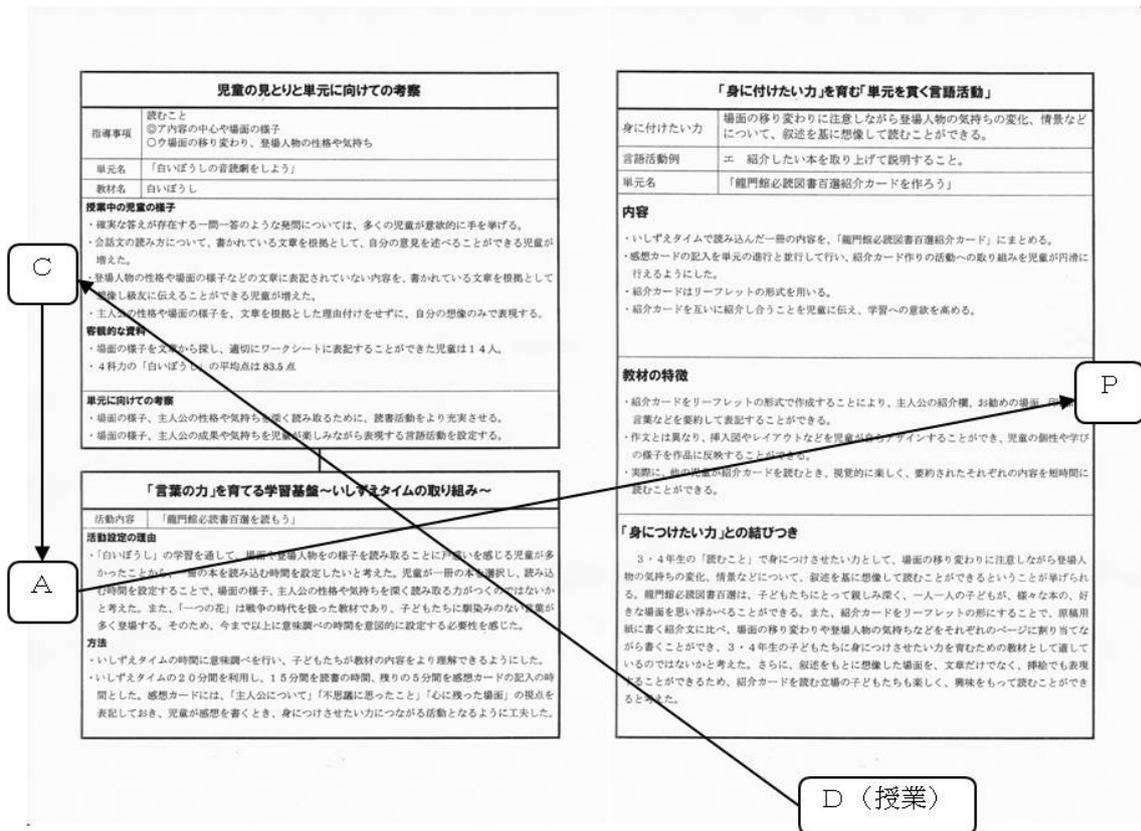
Cで不足していると分析した力を毎週2回実施する「いしずえタイム」にて補充指導する。

P: 「身に付けたい力」を育む「単元を貫く言語活動」

目標・児童の実態・教師の願い・単元設定の理由・方略・学習環境・教材について・単元計画・本児の指導の項目による指導案を作成し、「身に付けたい力」を明確にした単元構想をする。

D: 授業での指導

以上のようにして、CAPDのサイクルで国語科の授業を展開した。(図2)



(2) ICTを活用した国語科指導の展開

ア 書く活動(視写、聴写、語彙、文法、まとめ方、漢字など)と読む活動

群読、名文暗記、龍門必読100選読破を朝読書、全校国語、きらきらタイムで取組みICT活用を図った。

イ 表現力を高める工夫をする。

はじめのうち、タブレットPCは、教師の提示用として利用されることが多かったが、子供達を使い、それぞれの考えを交流し評価し合う活動に取り組んだ。(写真1)



## 5. 研究の成果

### (1) ICT利用の有効性の検証

主にタブレットPCを利用したが、想像以上にその有効性を感じた。それは、子供達に共通の認識を持たせられるということである。言語や文字による指示で、全ての子供達に共通の認識を持たせることは難しい。

しかし、タブレットPCをテレビに投影し、具体的指し示すことで、全ての子供達に共通の認識を持たせられることが分かった。子供達は映像文化に親しんでおり、テレビに投影された画像や動画には、大変、注意力をもって視聴することができることも背景にあると感じている。

### (2) ICT利用による児童のコミュニケーション能力育成についての検証

タブレットPCが、児童の興味・関心を引くことは(1)で述べた通りだが、興味・関心をひくツールを介してのコミュニケーションは言うまでもなく活発となる。タブレットPCは、言い換えるならば、画像も、動画も、教材も移せる少し小さ目のホワイトボードとも言える。国語科の教材について話し合いをしている場面では、タブレットPCに根拠となる文章を写し示し合い話すことで、教科書を見せ合ったり、言葉でやりとりをする以上に活発な話し合いがなされた。まさに、児童のコミュニケーション育成のための強力なツールであった。

## 6. 今後の課題・展望

### (1) 教員への啓発とスキルアップ

本年度の取り組みの実績を改めて明示し、ICT活用への啓発を図っていくことが大切である。

また、年度ごと入れ替わる教員のスキルアップも欠かせない。何人かのリーダーを作り、リーダーを核として日常的な利用につなげるようにしていくようにしたい。

### (2) 環境の整備

#### ア NASの設置

本研究を進めあるに当たって、現在のタブレットPCを使用するときに、不便を感じたことがある。それは、データの共有やデータの配信である。一つのタブレットPCを通じて、グループ内で共通認識をしたりコミュニケーションを行ったりすることはできるが、学級内で同じデータを共有することが難しかった。ドロップボックス等の利用も試みたが、市内のWebサーバのセキュリティ設定で可能でないことが分かった。

今後は、NAS (Network Attached Storage)を設置し、データの共有をし、一層活用を進めていきたい。

#### イ AppleTVの常時接続

教員がICTを活用するか否かを大きく左右するのは、すぐに使える環境であるかどうかということである。現在は、iPadの台数しかAppleTVがないが、モニターとして使っているTVにHDMI端子をつなぎ電源を入れるという作業は、利用する際の1つの障壁となっている。

今後は、モニターとして使っているTVに常時AppleTVを接続し、どの教室にiPadを持って行っても、すぐに使えるような状況を作り、活用を一層推進していきたいと考えている。

## 7. おわりに

「国語科でパソコンなんて・・・。」という意識は、教員であれば、誰もが持っている感覚かもしれない。しかし、本研究を通して、タブレットPCは共通認識・コミュニケーション力の育成という点で、大変有効であるということが検証できた。

はじめのうちは、タブレットPCの起動から抵抗を感じた教員も多かったような状況だったが、使い始めてみれば、何ということはなく、また、子供達に使わせてみると、教員以上に慣れが早く、その可能性はどんどんと広がっていった。

今後は、データ共有とその利用ということに焦点をあて、研究に取り組んでいきたいと考える。

### < 参考文献 >

- ・「iPadで拓く学びのイノベーション～タブレット端末ではじめるICT授業活用」  
森山 潤・山本利一・中村隆敏・永田智子 編著 高陵社書店
- ・「iPad教育活用7つの秘訣～先駆者に聞く教育現場での実践とアプリ選びのコツ～」  
小池浩司・神谷加代 共著 ウィネット社